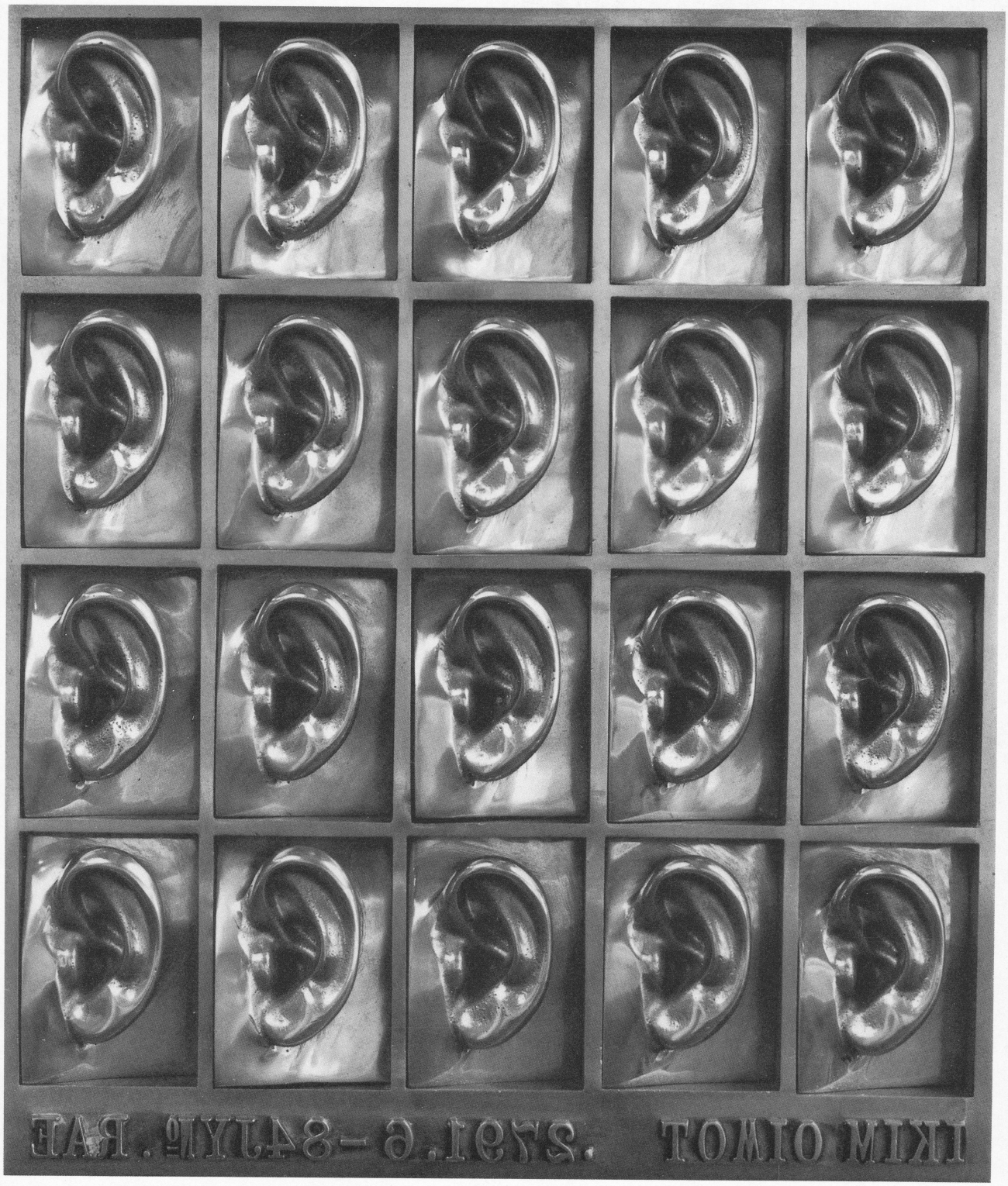


三木富雄

MIKI TOMIO

三木富雄展

MIKI　TOMIO

1986年7月7日—7月26日

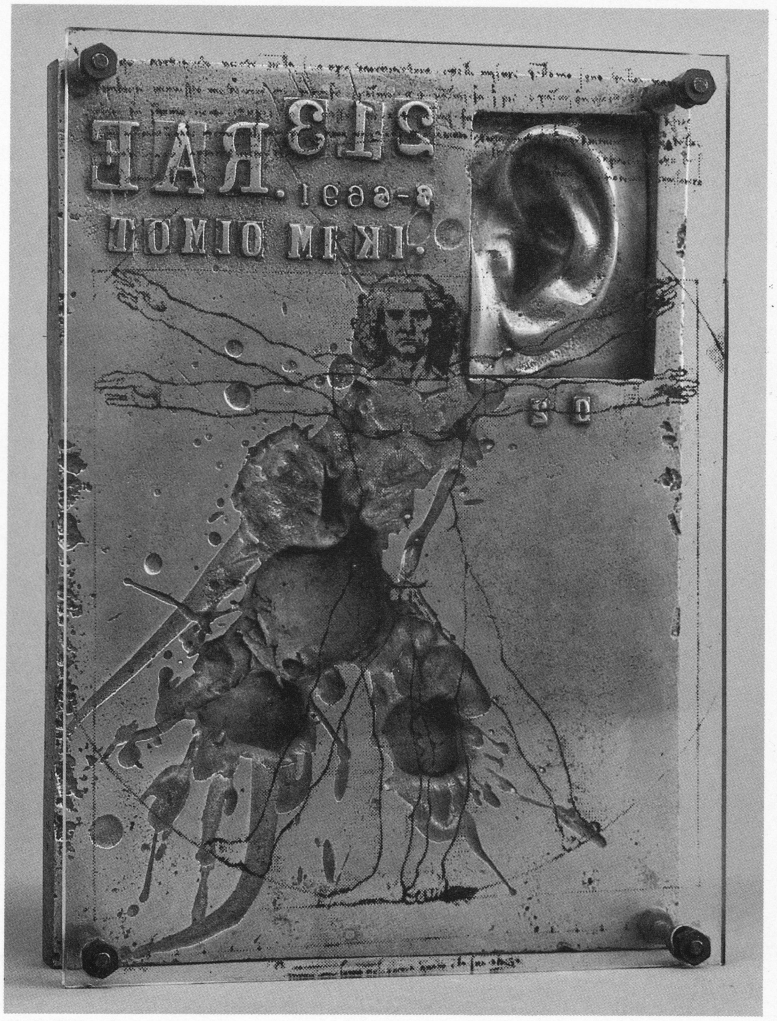
三木富雄のこと

三木多聞　MIKI TAMON

「耳の三木」として知られた三木富雄が40歳で亡くなってから8年が経過した。三木が美術界に登場したのは1950年の末、読売アンデパンダン展などであった。赤瀬川原平、荒川修作、篠原有司男、吉村益信らの「ネオ・ダダ・オルガナイザース」グループに直接参加しなかったが、その周辺で活躍し、切り開いたタイヤなどの廃品をアッサンブラージュした大型のオブジェを発表した。その三木が「耳」をつくりはじめたのは1963年である。彼の友人の1人、田中信太郎は「追悼　耳の終焉」(1978・5　美術手帖）の中で、「——その後駒沢公園の横に移転した三木さんは、六畳位の屋根の低いガレージが制作の場所となった。1963年、最後の読売アンデパンダン展となった年の初め、『バラの耳』と題する耳の処女作を見に駒沢へ訪ねていった。白い石膏の膚に赤いバラの絵が無数に張りつけてある無気味なロマンティシズムを漂わせた作品であった。しかし石膏の脆さを嫌い、すぐに本格的なアルミを鋳造した金属の耳へと移行したのだった。それから15年間、耳にとりつかれた三木さんは夏は裸で、真冬も小さな石油ストーブ1箇の寒いガレージで来る日も来る日も昼も夜もなく、これほど極度な人間がいるのだろうかと思うぐらい、次から次へと耳を生み続けた。」と回想している。

「耳の三木」を深く印象づけたのは、その1963年の内科画廊での個展であった。新橋の古いビルの一隅にあったこの画廊は、短期間ではあったが若いアーチストたちの発表の拠点であった。人体の一部をオブジェとして提示した例はもちろんないわけではないが、内科画廊で展示された「耳」の群れは、いかにも不思議な存在感を秘めていた。注目を集めた「耳の三木」は、1964年南画廊の「ヤング・セブン」展、第六回現代日本美術展コンクール部門受賞、65年椿近代画廊の「彫刻の新鋭」展、南画廊個展、ニューヨーク近代美術館などでの「新しい日本の絵画と彫刻」展、66年国立近代美術館の「現代美術の新世代」展、南画廊の「色彩と空間」展、松屋の「空間から環境へ」展、67年第九回日本国際美術展受賞、第五回パリ・ビエンナーレ展受賞、宇部市野外彫刻美術館の第二回現代日本彫刻展、長岡現代美術館の第四回長岡現代美術館賞展、68年第34回ベネチア・ビエンナーレ展、第八回現代日本美術展、69年第九回現代日本美術展フロンティア賞受賞、東京国立近代美術館の「現代世界美術展」、

表紙：EAR No. YJ48-6　1972　35.8×30.2×4.3



EAR 312
1966-68
28.1×25.0×6.4

彫刻の森美術館の第一回現代国際彫刻展、第10回サンパウロ・ビエンナーレ展と、1960年代の、いわゆる「反芸術」的傾向を代表するアーチストとして、国の内外で活躍した。

三木富雄がなぜ耳をつくり続けたのか、このアーチストに対して絶えず発せられた問いであった。なぜ「耳」を選んだのか、恐らく三木自身説明できなかったと思うし、誰にもわからない。田中信太郎は前述の追悼文のなかで、これに関連して「最初、三木さんは制作の動機を『耳に選ばれた』と文学的な説明をしたが、第1作目から完璧な完成度に高められた金属の耳は、そして特異なモチーフであるそれは、強烈であるがゆえなおさらマンネリと受け取られるのも早く、それを意識してか何度となく他の作風への脱皮を試みたが、そのつど耳から離れる事のできない宿命みたいな因縁を感じていたらしい」（同前）と友情をこめて語っている。「耳」はアルミ合金を主に、等身大から2メートルほどの巨大なものまで、小さな耳を多数はめこんだレリーフ状の作品、巨大な耳を分割して色彩パネルと合成したもの、耳につながる内部器官を露出した作品、アクリル板に耳のイメージをプリントしたもの、それと金属オブジェを合成した作品等々、さまざまなヴァリエーションとして作り続けた。

それらは「耳」をモチーフとした飽くなき探求であり、そこに三木富雄のアイデンティティがあった。「耳に選ばれた」このアーチストは、田中もいうように「耳に取り憑かれた」男でもあった。そして「耳」と格闘し続けたアーチストともいえよう。67年宇部の巨大な切り抜き文字のような「E・A・R」や、69年彫刻の森美術館の「EAR」の刻印を打った巨大な円柱状の「鋳造アルミニウム」など、野外の場で「耳」の形から離れようとして「耳」から離れられなかった挑戦の軌跡である。

1970年代にはいって、71年ロックフェラー財団の招きで渡米、1年間滞在した。この間新しい領域をもとめて模索を続けた。74年コルディア・エクストローム画廊での個展が計画されたが実現せず、78年急逝した。

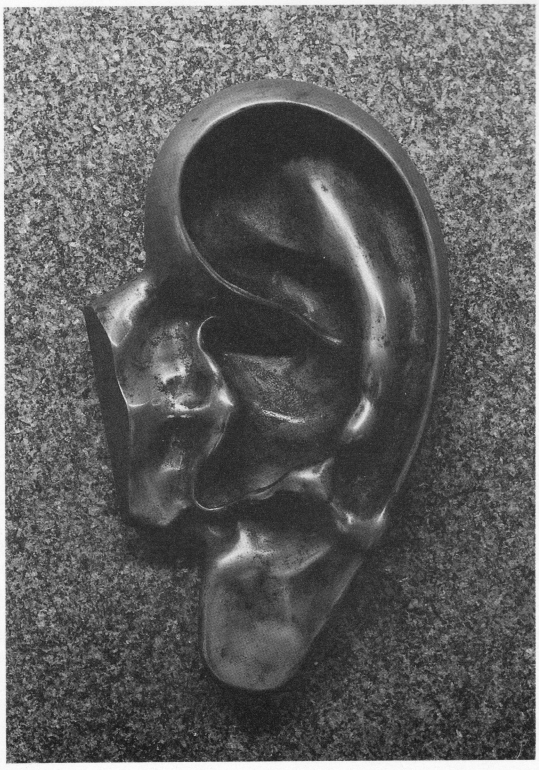
「耳に取り憑かれた」三木とオプセッションをどう解釈するか、さまざまな見方があるだろう。「耳」の呪縛と執拗に格闘し続けることによって、彼は独自の世界を獲得することができたに違いない。

EAR 7
1965
29.0×18.0×8.0

題名、制作年不明
40.0×25.5×8.0

題名、制作年不明
66.7×43.3×25.7

EAR
1977
78.0×47.0×20.0
撮影　小川隆之



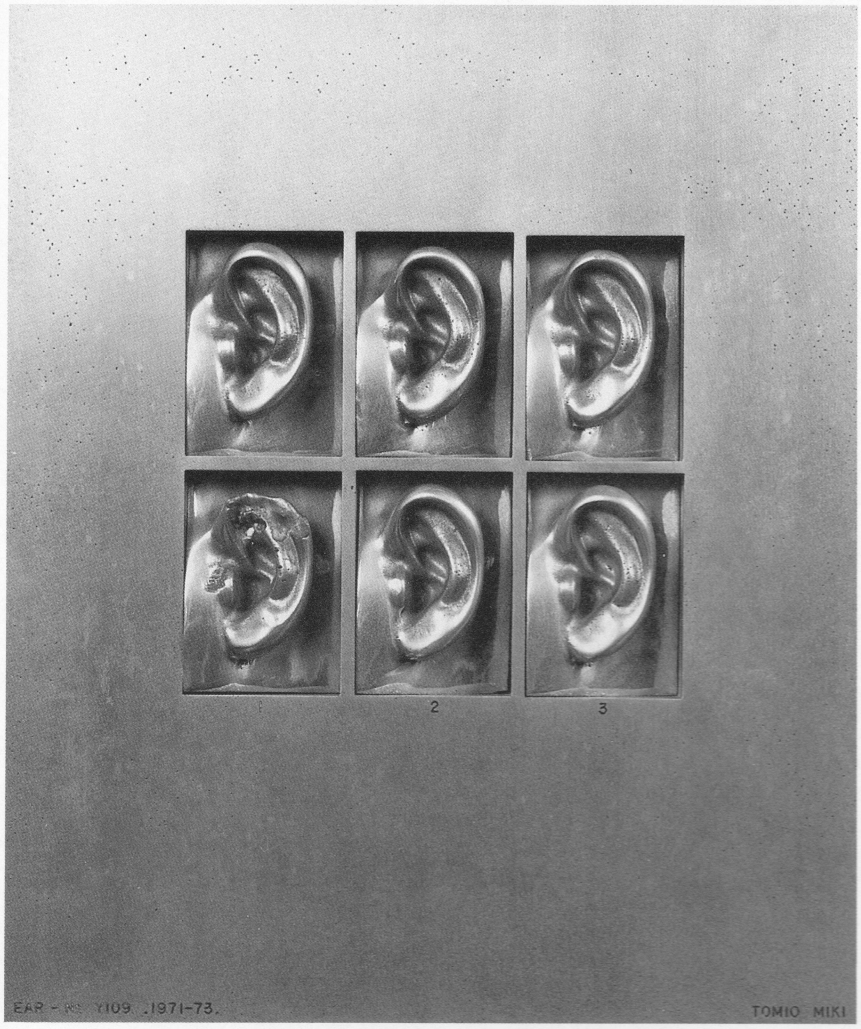
題名、制作年不明
27.0×16.0×6.0

題名、制作年不明
75.0×43.0×17.0

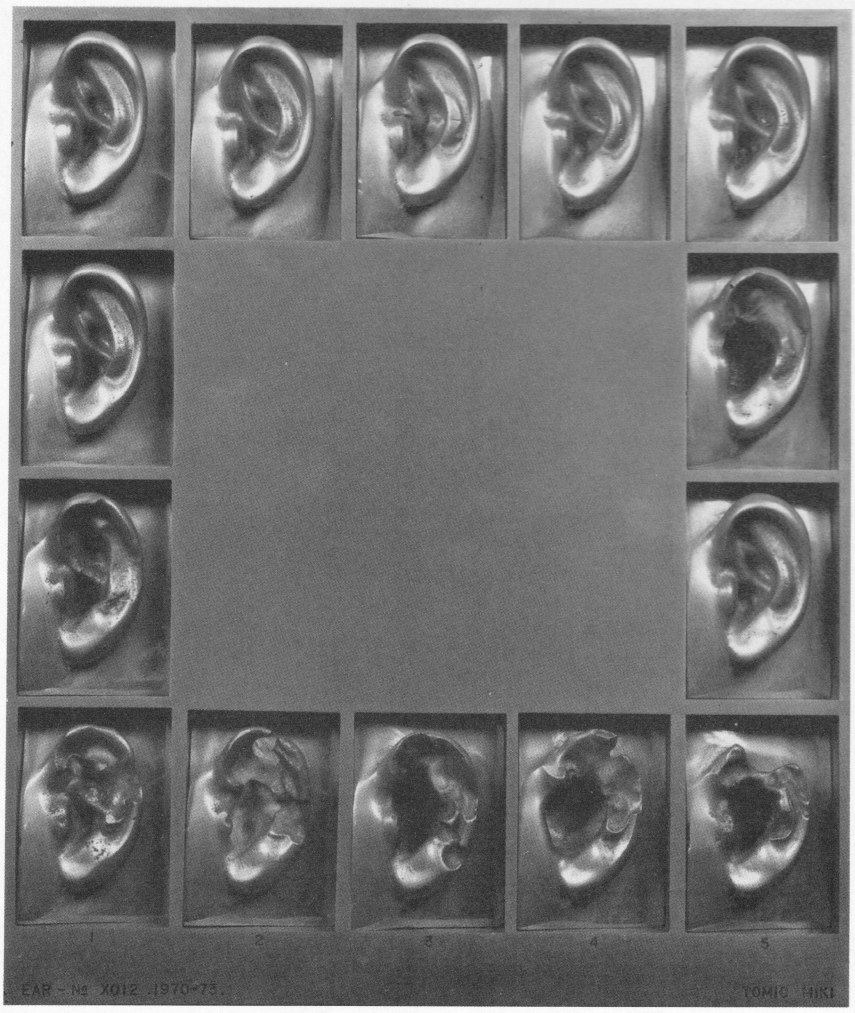
題名、制作年不明
76.5×45.5×17.0

題名、制作年不明
170.0×138.0×33.5

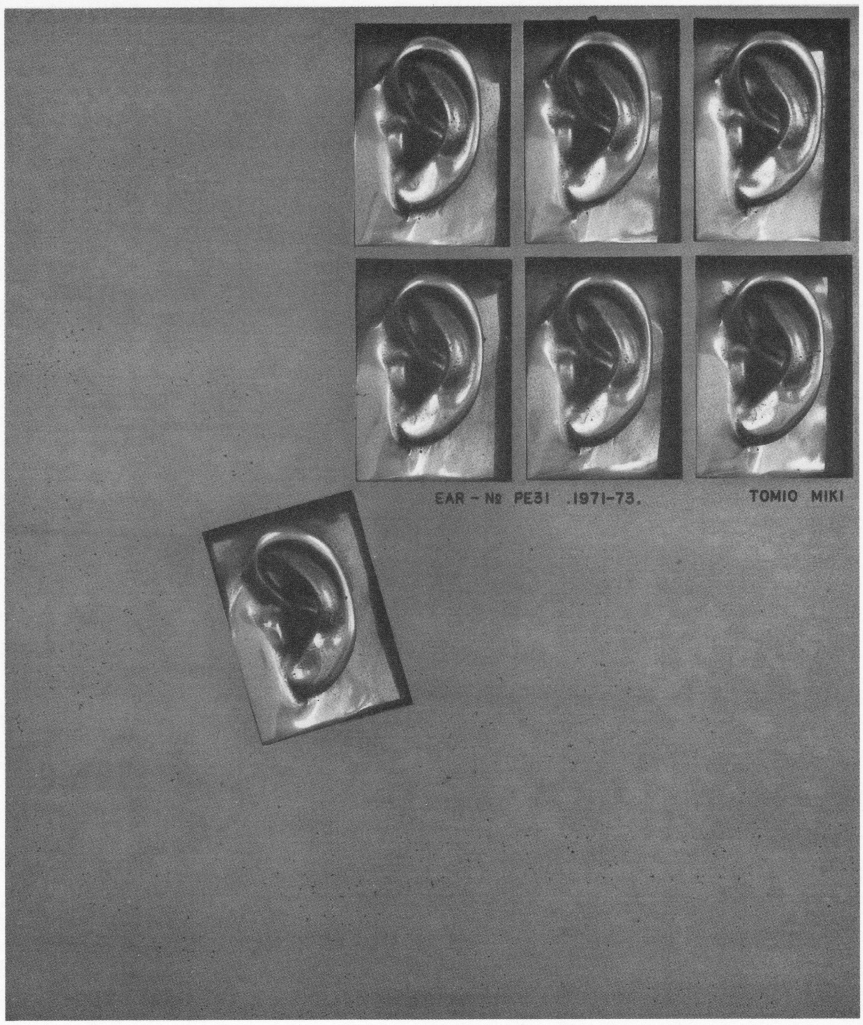
「耳」
制作年不明
169.0×100.0×60.0
撮影　小椋安幸



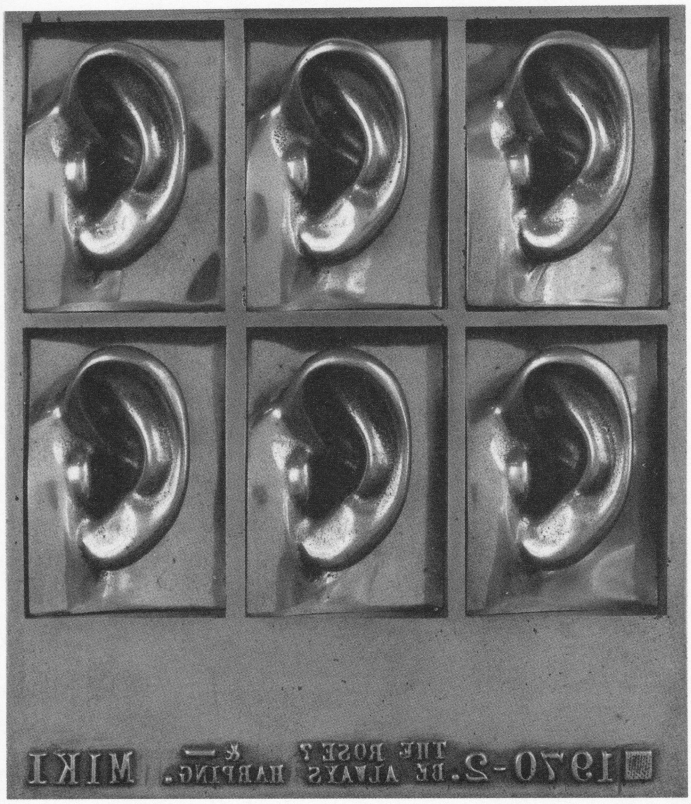
EAR No. Y109
1971-73
35.9×30.2×4.0



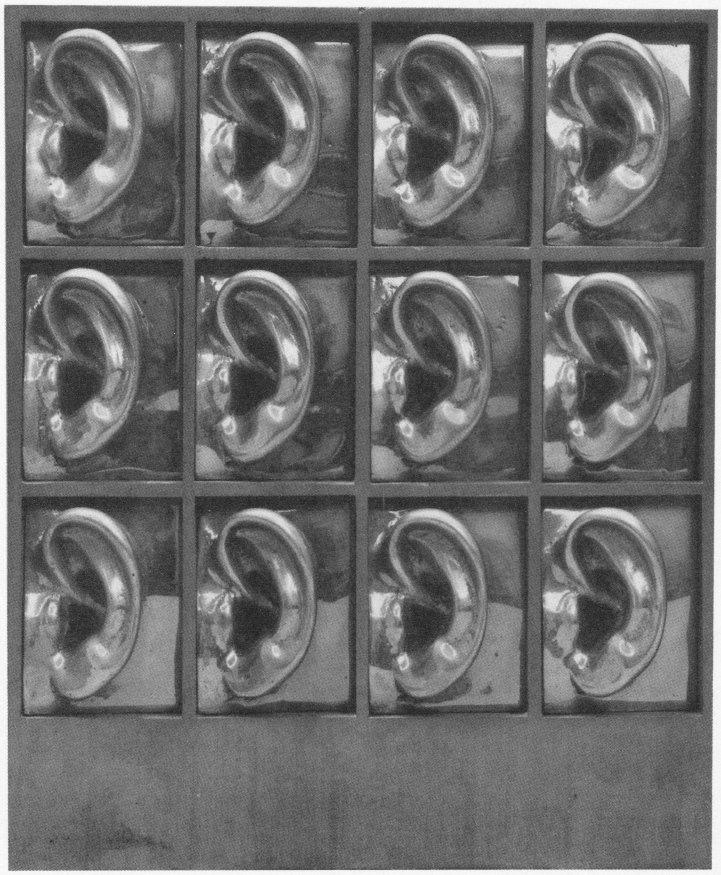
EAR No. X012
1970-73
35.9×30.3×4.0



EAR No. PE31
1971-73
35.7×30.2×4.0



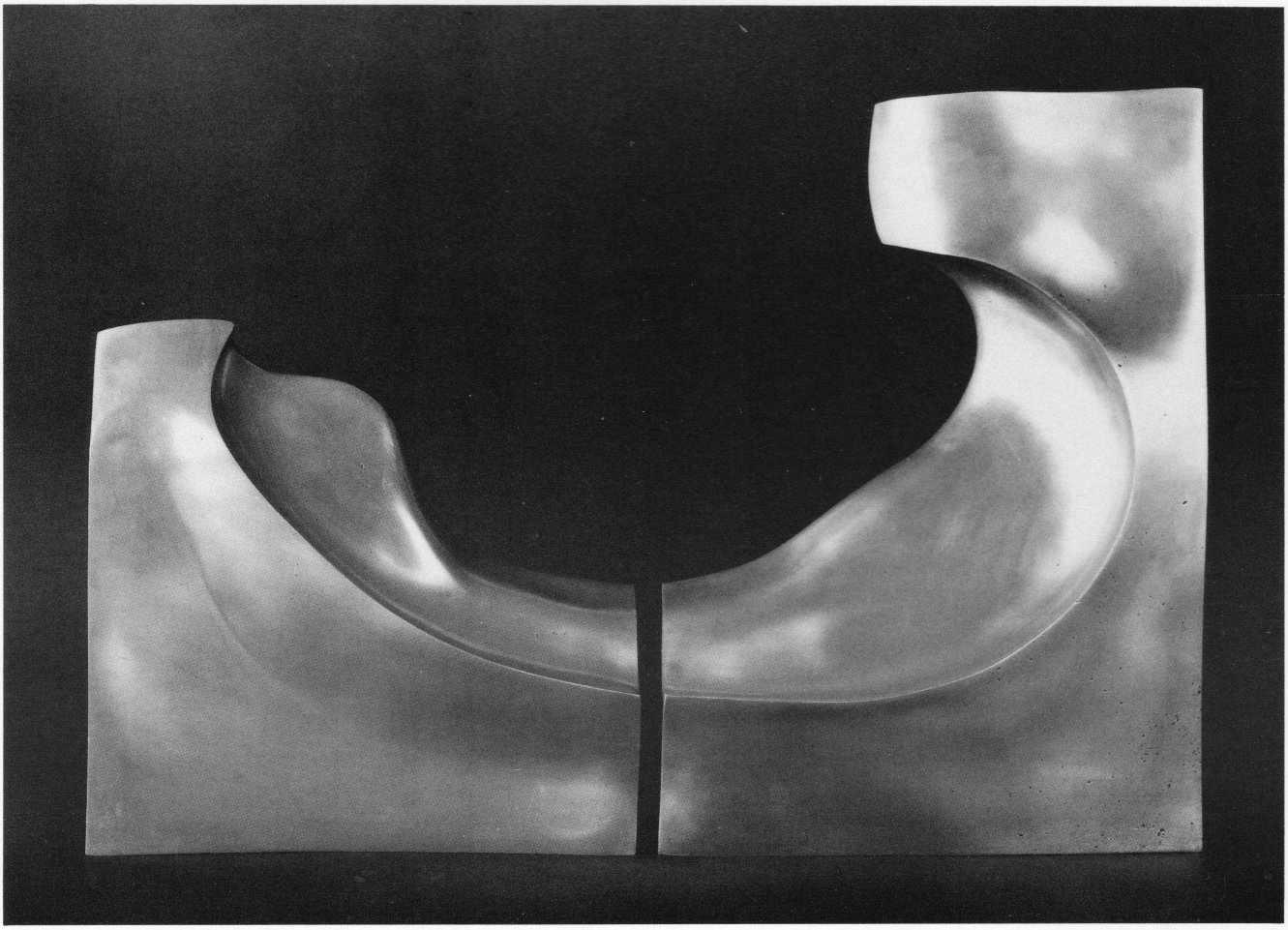
THE ROSE ? &—
BE ALWAYS HARPING.
1970-72
21.3×18.3×4.0



題名、制作年不明
28.3×23.3×8.0

「EAR 239 MIKI」
制作年不明
19.0×17.2×4.5

題名、制作年不明
40.0×25.5×7.0



題名、制作年不明
42.2×62.5×14.0

Love takes Life time
1977
82×62

年　譜　Chronology

(1)

1938(昭和13)年　１月18日、東京都杉並区高円寺１の40(現・東京都杉並区和田３丁目)に三木健嗣、富美子の二男として生まれる。[2] 長男は敦雄、三男は国義、四男は雅雄、五男は博雄。

1950(昭和25)年　３月25日、杉並区立第10小学校(現在も同じ)を卒業。〈第13回生〉

1953(昭和28)年　３月25日、杉並区立高南中学校(現在も同じ)を卒業。〈第３回生〉

1962(昭和37)年　12月28日、志賀健蔵とジョリスシャポー・ギャラリー(福岡市)でハプニング〈「遺言執行」〉。

1964(昭和39)年　１月30日、公開討論会「反芸術―是か非か」(於:ブリヂストン・ホール)に出席。〈針生一郎、磯崎新、杉浦康平、池田龍雄、東野芳明、三木富雄、一柳慧〉

1964(昭和39)年　２月５日、読売アンデパンダン展中止決定後の対応策を話し合うための集会に参加。(於：新宿厚生年金会館)

1966(昭和41)年　勅使河原宏監督の「他人の顔」のセットを製作。

1968(昭和43)年　詩画集『あんま』を刊行。[3] 〈池田満寿夫、加納光於中西夏之、中村宏、野中ユリ、三木富雄、飯島耕一加藤郁乎、澁澤龍彦、瀧口修造、三好豊一郎、吉岡実田中一光〉

1970(昭和45)年　日本万国博覧会の金曜広場に耳のオブジェを制作。

1971(昭和46)年　ロックフェラー財団の招きで渡米(約１年間)。

1976(昭和51)年　渡米(約２～３ヵ月間)。

1977(昭和52)年　９月11日、テレビ美術館で「三木富雄〈耳から、林檎園から……〉」を放映。

1978(昭和53)年　２月15日、京都で急逝。(享年40歳)

(注)１　「1957年　東京衛生技術学校卒業」というのが従来の年譜の定説になっているが、今回の年譜作成にあたってもう一度調査した結果、どうしてもその事実を確認することができなかった。当時の私立の理容学校のうち東京衛生技術学校と似かよった名称をもつ学校は「東京公衆衛生技術学校」(現・窪田理容美容専門学校)と「東京衛生学園」(現在も同じ)のふたつであるが、「場所は中野」という遺族の証言から考えて、「東京公衆衛生技術学校」の可能性が高いだろう。しかし1957年前後に彼が「東京公衆衛生技術学校」を卒業したという実績はなく、あるいは中退したのかもしれない。いずれにせよ、三木が美術を手がけるまえに、理容の勉強をしたことは間違いないと思われる。

(注)２　1938年は戸籍上の生誕年で、実際に生まれたのは1937年12月18日である。

(注)３　『美術手帖』No.355(1972)、P.176

参考文献 Bibliography

※参考文献のうち、■印は三木富雄自身によるもの、□印は三木富雄に関するものである。

1959年□中原佑介「三木富雄初の個展―展覧会週評」(『読売新聞』夕刊 7.31)

1963年□東野芳明「新人登場―三木富雄」(『美術手帖』No.228)

1964年■「現代作家の発言―日本の先鋭たち」(『みづゑ』No.707)

1965年□白石かずこ「三木富雄展、向井修二展」(『三彩』No.194)

□東野芳明「Letter from Nerja」(『三木富雄展』カタログ)

□小川正隆「奇怪な幻想の世界」(『朝日新聞』夕刊10.28)

■「アンケートに対する解答」(『美術手帖』No.258)〈特集 ボディアート〉

1966年□赤塚行雄「三木富雄論」(『現代美術』No.8)

□座談会「戦後美術―〈合理〉と〈神秘〉の間隙」(『美術ジャーナル』No.56)〈高松次郎、中西夏之、三木富雄、針生一郎〉

□岡田隆彦「三木富雄」(『美術手帖』No.262)〈世界・今日の美術・50人の作家〉

1967年□藤枝晃雄「アトリエ訪問―三木富雄」(『美術手帖』No.285)

□東野芳明「〈耳〉の爽快な軽薄さ」(『中央公論』No.957)〈創作シリーズ 現代絵画の12人 第6回〉

□針生一郎「東京ビエンナーレ 受賞の理由」(『芸術新潮』vol.18、No.7)

□岡田隆彦「像―第5回パリ青年ビエンナーレ展で入賞した三木富雄」(『SD』37)

1968年□東野芳明「世界に通用する日本の12人―三木富雄」(『芸術新潮』vol.19、No.1)

□東野芳明「MIKI AND EARS」(作家紹介のための英文パンフレット『MIKI』)

■「作品と作家の言葉―ヴェネチア・ビエンナーレに出品する四人の作家」(『美術手帖』No.297)

1975年■「現代展とはなんの関係もありません」(『美術手帖』No.396)

1976年□岡田隆彦「三木富雄と語る―なぜ耳なのか」(『みづゑ』No.851)

1977年□ヨシダ・ヨシエ「展覧会月評―三木富雄個展」(『日本美術』No.142)

□木島俊介「展評―三木富雄個展」(『美術手帖』No.423)

1978年□田中信太郎「耳の終焉」(『美術手帖』No.433)

1981年□谷川晃一「外燃機関を求めた〈耳〉―三木富雄の回顧展にふれて」(『週刊読書人』1.19)

□坪内一忠「展評―三木富雄個展」(『季刊アート』春号)

□尾野正晴「異色作家の可能性と限界」(福岡市美術館ニュース『エスプワナード』3.25)〈三木富雄展〉

□尾野正晴「小さな企画でも―展覧会」(『美術手帖』5月号)

□宮迫千鶴「近代の〝耳〟から現代の〝大〟へ―三木富雄と坪内一忠をめぐって」(『季刊アート』秋号)

1983年□井手則雄「三木富雄の耳」(信濃デッサン館『デフォルマシオン』27号

1985年□秋田由利「三木富雄のメタモルフォーゼ―アートリーディング」(『美術手帖』2月号)

□井手則雄「沈黙の耳―ふたたび三木富雄について」(『構造』6月号)

展覧会 Exhibitions

※各展覧会については、会期・名称・会場・出品作品の順に記した。□印はグループ展であり、■印は個展である。

1958年□ 2.11― 2.16 三木富雄・金子謙一2人展、櫟画廊

□ 3.12― 3.27 第10回読売アンデパンダン展、東京都美術館〈「無」・「クツセツ」〉

1959年□ 1.22― 1.27 三木富雄・金子謙一2人展、櫟画廊

■ 7.27― 8. 1 三木富雄個展、櫟画廊

1960年□ 3. 1― 3.16 第12回読売アンデパンダン展、東京都美術館〈「32/0」・「30/5」・「31/5」〉

■ 8.15― 8.20 三木富雄作品展、文芸春秋社画廊

1961年□ 3. 2― 3.16 第13回読売アンデパンダン展、東京都美術館〈「Right Box 505」[1]・「Right Box 275」〉

1962年□3月 グループSWEET展、かわすみ画廊[2]

□ 3. 2― 3.16 第14回読売アンデパンダン展、東京都美術館〈「主賓」など〉

1963年□ 3. 2― 3.16 第15回読売アンデパンダン展、東京都美術館〈「あなたの保険」[3]〉

□ 4.23― 4.28 グループSWEET展、新宿第一画廊[4]

■ 8.12― 8.17 三木富雄個展、内科画廊

1964年□ 1.30― 2.15 ヤングセブン展、南画廊(三木富雄、荒川修作中西夏之、菊畑茂久馬、岡本信治郎、立石紘一工藤哲巳)〈「耳」など〉

□ 5. 9― 5.30 第6回現代日本美術展、東京都美術館〈「耳」〉(コンクール賞受賞)

□ 6.15― 6.22 オフ・ミューゼアム展、椿近代画廊

1965年□ 1.13― 1.18 彫刻の新鋭展、椿近代画廊[5]〈「Ear No.193」など〉

□ 4.29― 6.13 The New Japanese Painting and Sculpture, San Francisco Museum ofArt, San Francisco, U.S.A.[6]〈「Untitled(Ear)」・「Untitled(Ears)」・「Untitled」〉

□ 5.10― 5.30 第8回日本国際美術展、東京都美術館〈「Ear 104」〉

□ 6.18― 7.25 現代美術の動向展、国立近代美術館京都分館〈「耳」・「耳」〉

□10. 1―10.31 第1回現代日本彫刻展、宇部市野外彫刻美術館〈「Ear」〉

■10.18―11. 6 三木富雄展、南画廊〈「Ear No.201」・「Ear No.109」など〉

□12. 1―12.27 第2回長岡現代美術館賞展、長岡現代美術館〈「Ear No.104」など3点〉[7]

1966年□ 1. 4― 1.16 第17回秀作美術展、日本橋・三越〈「Ear 108」〉

□ 1.21― 2.27 現代美術の新世代展、国立近代美術館〈「角の生えた耳1」・「角の生えた耳2」・「耳201」「耳113」・「耳」〉

□ 5.10― 5.30 第7回現代日本美術展、東京都美術館

〈「Ear No.303」・「Ear No.304」〉

□ 6.15— 7.15 Modern Art of Japan, Galleria del Cavallino, Venice, Italy 〈「Ear No.113」など〉

□ 9.26—10.20 色彩と空間展、南画廊（湯原和夫、磯崎新、田中信太郎、山口勝弘、サム・フランシス、アン・トルーイット、五東衛、三木富雄）
〈「作品」[18]〉

□11.11—11.16 空間から環境へ展、銀座・松屋
〈「作品」[19]〉

1967年□ 5.10— 5.30 第９回日本国際美術展、東京都美術館
〈「Ear Pink 12」〉（日本国際美術振興会賞）

□ 9.30—11. 5 第５回パリ・ビエンナーレ展、パリ市立近代美術館〈「Oreille rose」・「Oreille 201」〉（アンドレ・シュス賞受賞）

□10. 1—11. 5 第２回現代日本彫刻展、宇部市野外彫刻美術館
〈「Ear」〉

□11.20—1968.1.30 第４回長岡現代美術館賞展、長岡現代美術館
〈「作品」〉

1968年□ 2.27— 3. 6 第34回ヴェネチア・ビエンナーレ展出品作品国内展示、東京国立近代美術館
〈「Ear-Mirror No.１」・「Ear-Mirror No.２」・「Ear-Mirror No.３」・「Ear」・「Ear」〉

□ 5.10— 5.30 第８回現代日本美術展、東京都美術館
〈「Ear」(Blue)・「Severance」〉

□ 6.22—10.20 第34回ヴェネチア・ビエンナーレ展
〈「Orecchio, specchio １」・「Orecchio, specchio ２」「Orecchio」〉

1969年□ 5.10— 5.30 第９回現代日本美術展、東京都美術館
〈「Seven Floors」〉（フロンティア賞）

□ 6.12— 8.17 現代世界美術展—東と西の対話、東京国立近代美術館 〈「Ear」〉

□ 8. 1—11.30 第１回現代国際彫刻展、彫刻の森美術館
〈「鋳造アルミニウム」〉

□９月—12月 第10回サンパウロ・ビエンナーレ展
〈「Sete Andares」・「Vidro, Vidro, Vidro」〉

1970年□ 3.15— 9.13 万国博美術展、万国博美術館
〈「耳」〉

1971年□ 7. 1—11.30 第２回現代国際彫刻展、彫刻の森美術館
〈「耳」〉

1972年□ 9.20— 9.30 ヴェスビオ大作戦・プロジェクト展、南画廊

■11.20—12.10 三木富雄展、南画廊

1973年□ 5.10— 5.30 現代日本美術展—現代美術20年の展望、東京都美術館 〈「耳」・「耳」〉

□ 6.12— 7.29 戦後日本美術の展開—抽象表現の多様化展、東京国立近代美術館 〈「耳」〉

1974年□ 5. 3— 6. 9 Japan - Tradition und Gegenwart, Städtische Kunsthalle, Düsseldorf, West Germany
〈「Ohr」・「Ohr」・「Ohr」・「Ohr」・「Ohr」「Ohr」・「Ohr」・「Ohr」〉

□ 5.10— 5.30 第11回日本国際美術展、東京都美術館
〈「耳」〉

□ 9. 7—11. 3 Japan på Louisiana, Louisiana Art Gallery, Denmark 〈「ø re」・「ø re」・「ø re」・「ø re」「ø re」・「ø re」・「ø re」・「ø re」・「ø re」〉

1975年□ 8. 1— 8.15 立方体—基本形態の展開展、青画廊（淡島雅吉清水九兵衛、久世建二、関根伸夫、多田美波、田中信太郎、戸村浩、堀内正和、三木富雄、吉本直貴、八木一夫、若林奮）
〈「裏返しの耳あるいは拷問台No.２」〉

□ 9. 5— 9.14 日本現代美術の展望展、西武美術館
〈「耳」・「耳」・「耳」・「耳」・「耳」・「耳」・「耳」〉

1977年□ 3.14— 3.23 京都アンデパンダン展、京都市美術館
〈「Ear 1001」〉

□ 4.19— 5. 6 The Money Shows, George Paton Gallery, Melbourne University Union, Australia

■ 5.13— 6. 2 林檎園より春の心、グリーン・コレクションズ

□ 9. 5— 9.17 ドローイング５人展（高松次郎、三木富雄、中西夏之、野田裕示、李禹煥）

1979年■ 7. 2— 7.21 三木富雄展—Ear Series、兒嶋画廊

□ 9. 1— 9.30 明治・大正から昭和へ——近代日本美術の歩み展 東京都美術館 〈「Ear」〉

□11. 7—11.24 Japanese Sculptors, Sculpture Center, New York, U.S.A. 〈「Ear」・「Ear」など〉

1980年□ 2.23— 3.16 現代彫刻の歩み展、神奈川県立県民ホール・ギャラリー 〈「Ear No.104」・「耳(分割された耳)」〉

■11. 8—12. 6 三木富雄展、ギャルリー・ところ

1981年■ 4.28— 5.24 三木富雄展、福岡市美術館

□12.4—1982.1.31 1960年代現代美術の転換期、東京国立近代美術館

1982年□ 9. 4— 9.22 三木富雄コラージュ、ドローイング展、兒嶋画廊

1983年□10.22—12.18 現代美術の動向２—60年代多様化への出発、東京都美術館 〈「EAR」〉

1985年□10.12—12. 8 現代美術の40年、東京都美術館 〈「EAR」〉

(注)1 カタログに記載されているタイトルは「Right Box」であるが、『美術手帖』No.355の77ページに掲載されている図版から判断すると、「Light Box」が正しいのではないかと思われる。

(注)2 『美術手帖』No.355(1972)、P.90

(注)3 カタログに記載されているタイトルは「あなたの保険」であるが、「あなたの保険」が正しいのではないかと思われる。

(注)4 『美術手帖』No.355(1972)、P.104

(注)5 『みづゑ』No.721(1965)、P.97

(注)6 このあとデンヴァー、アーバナ、オマハ、コロンブス、ニューヨーク バルティモア、ミルウォーキーを巡回。

(注)7 『美術ジャーナル』No.56(1966)、P.2

(注)8 『美術手帖』No.276(1966)、P.115

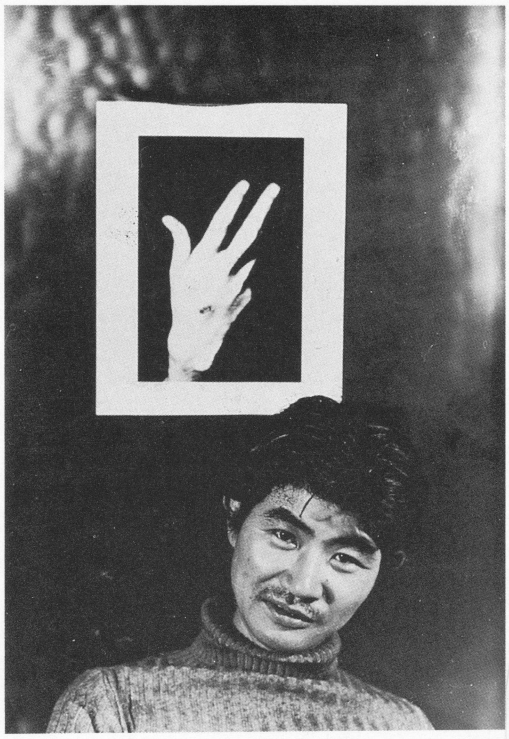
(注)9 『美術手帖』No.275(1966)、P.18

このたびの展覧会に際しましては、青木秀憲氏、内田繁氏、佐藤忠雄氏、三澤憲司氏、百瀬博教氏、兒嶋画廊、ギャルリーところの皆様にご協力をいただきました。心からお礼申し上げます。

尚、年譜、参考文献、展覧会については、1981年福岡市美術館三木富雄展カタログ（尾野正晴編）に記載されている事項に、1981年以降の事項を追加作成しました。

鎌倉画廊
中央区銀座7-10-8 平方ビル1F
TEL. 03-574-8307(代表)

三木富雄展カタログ
発行日 1986年７日７日
発行者 中村路子
製 作 鎌倉画廊
撮 影 内田芳孝



訂正とお詫び

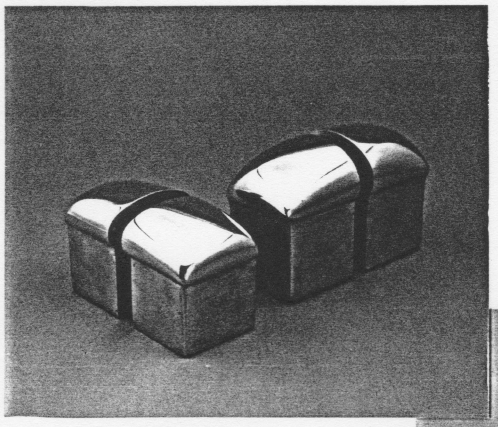
６１年７月７日から７月２６日迄、行われました

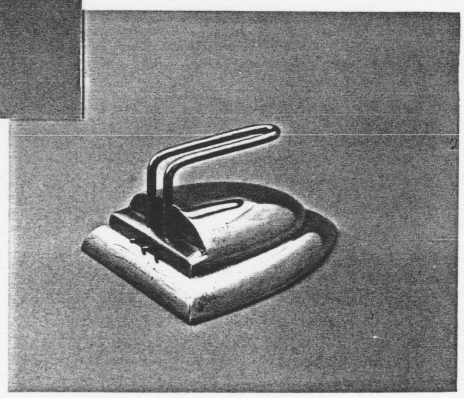
ー三木富雄展ー

で展示いたしておりました『食パン』と『アイロン』の作品は三木富雄氏の作品ではなく、古渡章氏の作品と判明いたしましたので、訂正させていただきますと共に、古渡章氏に深くお詫び申し上げます。

６１年７月

鎌倉画廊





Kamakura Gallery 7-10-8Ginza, Chuo-ku, Tokyo Tel. 03-574-8307